

毎月一回 15日発行昭和49年4月15日発行・第43号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

4 月 号



Libertaire VoL, V, No5

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年四月十五日発行第五十二号

定価一〇〇円(送料共) リベルテール

一人でいる時
寂しいと思う
他人に呼びかけても誰もこない時
無様だと思う
しかし

友よ、思え

一人としてやすらかに生き

一人としてやすらかに死んでいった者はいない
生ること

悔恨することもあろう

蔑視を感ずることもあろう

そんな時

友よ、思え

小供の頃。海へ行ったこと友と語り合った日々。

無政府の社会を

友よ

語れ

無政府の社会を!!

インフレ雑感

横倉辰次 1

黒色戦線

大島英三郎 2

雑報

3

思い出の1コマ

杉藤二郎 5

パトスの神話 121

小田光雄 6

十二月号見て

ヤマモト・アキ 16

黒旗の下に

18

表紙のことは

文明がもたらした頽廢に死を

飛べ、自由よ

空高く。

佐々木一兔

インフレ雑感

横倉辰次

一九七四年、現在の日本のインフレは正に企業家ブルジョアに依って画策されたインフレだが、企業家単独のものではない。それはバックアップしたのは政治家（特に自民党田中角栄）だ。悪辣なインフレで得た暴利を政治家（田中角栄）は決して民衆に返還すべきだと言わない。不当暴利として税として政府に吸収とると得々とほざいてる。政府に利潤を収奪するのを当然だと考えている。民衆に就て毛頭考えていない。

膨大な税収入を政府のものにして、日本列島改造の事業に使う気だろうか。

税金では企業家の利潤は根こそぎ収奪は出来るわけではない。政府が奪る前にその企業の従業員がおこぼれを頂戴してしまおう。

企業家は更に従業員を酷使して製産して次の利潤をあげるだろう。

インフレになれば、官公労はストライキをして賃金ベースアップをする。大企業の組織労働者も黙ってはいない。

官公労の多くは製産労働者ではないから社会に製品は

出す、紙幣は世間にダブつく。更にインフレは来るだろう。インフレの波をまともにかぶって困るのは零細企業の無組織労働者と社会の底辺で暮している貧乏人だ。プロレタリアと呼ばれる者にも完全に階級ができる、インフレについて行ける者と置き去りにされて行く者と。

官公労はゼネストをしても賃上げをするだろう。官公労は親方は日の丸だから普通一範の労働者と違って、何をしようが企業が倒産する心配はない。もし赤字が出れば国鉄でも郵政省でも料金をアップすればよいのだから。大企業の労働者は決して革命を思考しないだろう。嘗てのアナキスト連盟の機関紙「自由連合新聞」に大沢氏が「今後の革命はルンペンプロレタリアや小組合の労働者が主体になり得ない、大企業の組織労働者が、その主体になるべきだ」と書いているが、これは矢張り間違いだ。革命は突如、起るものではない。暴動が勃発し、それを革命へ導くべきだろう。そしてゲリラが発生して、

内ゲバは革命の起爆剤にはならない。インフレを恐れない田中角栄もゼネストは恐れる。それは革命への行程だからではない。自分自身の政治生命に影響するからだ。五月四日にゼネストをされる大衆に迷惑をかければ六月の参議院選挙に差支えるからだ。

遂にゼネストは革命の起爆剤ではなく、組織労働者の

賃上げ手段となり、政治家には革命の恐怖でなく選挙の票田荒し以外の何ものでもなくなってしまうのだ。

インフレ防止に田中角栄が経団連と会談しても何もでない。経団連は自民党の政治資金の弗箱だ。田中角栄には何も言える訳はない。猫に鈴をつける鼠みたいなものだ。

大衆と政治家を宛にするな。政治家はそんな事を考えではない。ないのだから。

アナキストに怠慢は許されない。爆弾を持てとは言わないが、プロパガンダに専念、挺身せよ。赤軍のアラブゲリラにいる斗士重信房子の自伝を見て、ハッとしたり。彼女が、正義の好きな父の訓辞として、次の如く言っている。

「物知りだけになるな」と。

黒色戦線

大島 英三郎

○クロボトキンは「一反逆者のことば」の中で「一つの行動は、よく千万のパンフレットにまさるプロパガンダをする」といいました。行動のない思想、実践のない理論は無価値です。

アナキストの献身的行動によって大衆の総蜂起の革命

戦は可能と信じます。

私の五年にわたる出版活動の何万部のパンフレットよりも、先年の皇居新宮殿の参賀への抗議の発煙筒の数秒の燃焼の方が、社会への影響力が多かったです。私はそれによって懲役四ヶ月を受けただけでした。

大衆の福祉を背に負って、国家権力と資本主義体制と戦闘するアナキストの、地位も財産も身体も投げすてての実践によって歴史は一大転回すると思います。空理空論をこねまわすのはムダです。

アナキスト運動は多様性です。自己に可能な戦野で全力をつくして活動することです。こうして革命戦は勝利を得るのです。革命は無数の戦士の参加を必要とします。もう開始されるのです。

○先日ある集会の帰り、ぐうぜん離れていた同志に混雑の駅であいました。私たちは人のまばらの所に行って再会をよるこびあいました。彼は杉や難波らが虐殺されてから五〇年、現体制に一撃をも加える同志のない状況を悲憤しました。しかし私たちのまわりを、ゆっくりと歩きまわる人相けわしい人がいるのです。知名のアナキストは行動が制約されてるのです。無名の戦士の決起によって警鐘は鳴りひびき大衆の総蜂起は可能と信じます。

『雑報』

○黒戦社の共学読書会は、初めは知り合いの二、三人がくるほどでしたが、ちかごろは十何人も集まるようになりきました。未知の青年男女で熱心にアナキズムを志す新人たちです。盲目に近い私は読書力がなくらいなので、さらに本等を買いたしてこの新しい大杉や野枝さんになる可能性のある若い人たちに微力をつくしたいと念願いたします。

お気軽においでください。

○四月十五日、それはギロチン社の中浜哲の刑死の日です。十月十五日は古田大次郎の刑死の日です。月かわれども日は同じです。それで私たちは両君の合葬される青山墓地に毎年四月十五日に墓参をつづけております。アナキスト革命に青春も恋愛も投げうったギロチン社の同志たちは、私たちに今何を訴え、何を求め、何を教えるでしょう。

世俗的な報賞のない黒色戦線はいつも少数です。しかしこの少数者の中から新しい大杉、野枝、中浜、古田、和田文子さんが生れつつあるのです。

(共学読書会は第二、第四日曜午後一時より、場所は杉並区方南町一の四九の一五、常陽コーポ2階六号。大島方。今度初心者に限定する事なく、来てよいそりです。ただ狭い所だから大挙して行かないよう。)

○「凝縮された『水俣の世界』を」と題するピラがある。「水俣病を告発する会」の機関紙『告発・縮刷版』の宣伝だ。水俣は工業一本槍の資本主義生活圏が、利益最多追求をする結果僕達になにをもたらすか、という問に対する解答としてできた。今やたくさんの工業害、人害の地を見る。本書『告発・縮刷版』はそのような中で斗った人々の記録であり、今これを出すのは残った水俣の世界を主体的にみつめて行きたいからだ、と言っている。(『告発・縮刷版』一〇〇〇円、『告発二・縮刷版』一五〇〇円、送料別。東京港区西新橋二の八の十三水俣病を告発する会。郵便振替、東京一八五〇六四)

○長野共同新聞社は「長野共同新聞」を出している。更にミニコミ読書会を毎週土曜夜八時より長野駅前「しんくう館」で開いている。連絡先は長野中央局私書箱九八号、長野へ平連。

このように開かれた会を定期的に、しかも根強く続けること、その中でこそよりよい理想、よりよい方法が見つけられていくだろう。

○三月三十一日、沼津はまのこで杉藤二郎さんの誕生日が開かれた。会する者杉藤さん他十七名、七十才の誕生

日を祝った。会終了後、山鹿文庫で歓談の一ときを過ぎ、また会することを約し別れた。

○ 四月一日、夜大島宅で前田幸長さんをまじえ、ヨーロッパの話を書いた。会するもの約十五名。

○ まだ残部があると思うので宣伝しておく。石川三四郎の「エリゼルクリュ・五〇〇円」「近世東洋文化史・八〇〇円」。パンフレット「農民の福音、没落の代議政体、無政府主義の原理と其の実現」三冊で二五〇円。

大阪市阿倍野区旭町2の12の2泉原文化。向井孝宛

○ 大泉市民の会が近く最後の朝霞デモを行い解散する予定だという。基地返還斗争のみが市民の会の目的ではないと思う。そう考えると残念だ。

○ 黒光9号10号が送られてきた。黒光社は志向社と合流するという。僕は一人一派の風潮には反対であるからいいことだと思う。それぞれ大阪・京都で独自に活動しながら、一つの統一の意志のもとに会する、これこそ自由連合ではあるまいか。ただ、共同アピールに「学生運動中心の運動から労働運動、地域住民斗争への全面的な転換を意味するものである。」と言って「改良主義的課題の急進主義的展開と革命的推進」と言っているのが少し心配だ。労働運動、地域住民斗争では字句の急進性さえ排撃の理由とされるから地道に改良主義に墮すること

なく頑張って欲しい。

○ 全関東単一労働組合の宣伝。一人でも加入することができる組合、ということである。孤独をかこつていた労働者諸君、是非加入し、主体的に活動されんことを。(連絡先、東京都千代田区飯田橋一の十二の三、村田ビル。全関東単一労働組合本部)

○ パランカ8号発行。秋田で発行されている詩の雑誌だが薄くなったので心配。購読できる人は購読して作品を送り少しでも厚くしてくれ。(秋田市將軍野南一の十の二八、草階方。パランカ社。送料共一一〇円)

○ 村上国治氏が「白鳥裁判やり望し要求一二〇万人署名運動」を社会党、共産党、総評、国民救援会などの手ですすめている。真実をさぐるためにはボルダ、アナダといわないで協力していこう。

○ 清水君救済、弁護士は積極的に取りくみそう。なお「〇〇だより」の改題2号「黒色救援2号」が出た。連絡先は(東京都中野区中央四の三一の十九、和田荘、西塔方。東京地区黒色救援会。代金一五〇円)

○ リベルテールの会にピラ、パンフなど積極的に送って下さい。リベルテールに載せられないかもしれませんが、色々の人がいるので案外共感者を見つかることができるかもしれません。情報も送って下さい。

思ひ出の一いき

杉藤 二郎

一九二三年大震災の後、下宿していた家の跡に、生残った近所の方がバラックを建てはじめた。私はその土地が自分の住んでいた所であり、持主は死んでしまったことも知っている。しかし、私が文句を言うわけにはいかない。私はとりあえず国(名古屋)へ帰る予定だったので、子供(下宿先から連れて出るといふより、とっさにだいてにげた可愛い女の子)をだいて歩き、何処の駅だったかおぼえていないが、とに角汽車に乗った。何時間かゝつただろうかだろろうか、ずい分たつて、何とか小田原に着いた。

小田原から汽車は、線路に亀裂ができて動けぬ。仕方がないので、下着をさいて紐を作り、子供を背中に負ぶって歩き出した。海岸ぞいの難所ものかは、足にまかせて線路の上を歩いて。どのくらい来たのか見当もつかなかったが、一軒の薬根の家を見つけた。その家にたどり着き、事情を話して一晩とめてもらうことになった。しかし、背中の子供が、どうしても私の背から離れようとせず随分と苦勞した。そのうち、その家の婆さんが見かねて、子供をあやしてくれたので、ようやく背から下

すことができた。

この家は薬根で、天井板はなく屋根裏が見える家である。屋根の裏を押さえている竹がすすけて、鉄パイプの如く見える。海岸端にある上に、天井がないので風通しがよく、暑い暑いその年の異状な暑さも、ここでは少しも感じられず、ゆっくり一晩やすんで、また歩き出した。その家で、次の駅までの道を聞いておいたので、今度は割合早く駅に着いたように思った。駅の名もおぼえていないが、小田原からトンネルを越えたように思っている。とにかく汽車に乗れた事はうれしかった。子供は安心したのか、すやすやと眠ってしまった。ぎっしりつまった超満員列車も、静岡あたりから降りる人が多くなり、ようやく僕も腰を下すことができた。僕もつかれていたので、子供を膝に置いて眠ってしまった。どのくらい眠ったか自分もわからない程、眠っていた。

名古屋へ着いた私は母と話し合い、その子を一番上の姉によって育てることになり、私は十日程たつてから東京へ帰って行った。

その女の子も今では人妻となり三人の母親になっているときく。当時七才だった橋宗一君が政治権力者と結託した軍部によって殺されたことを思い出し胸をいためるものがある。(一九七四・二・一八)